

たんぱく質がん細胞抑制

愛媛大など抗がん剤の効力高める

一部のがん患者に抗がん剤が特によく効くのは、がん細胞内にある特定のたんぱく質も一緒にがんを攻撃しているためだと、愛媛大などのチームが5日、発表しました。より効果の高い治療

※村井准教授への取材に基づく

法の選択につながる可能性
がある。論文が国際科学誌
に掲載された。

「SLFN11」と呼ばれるたんぱく質で、約半分の
がんで検出される。このた
んぱく質が多く作られる卵
巣がんや肺がん、膀胱がん

などでは、がんのDNAを
攻撃するタイプの抗がん剤
がよく効くとの報告が国内
外から相次いでいたが、仕
組みはよくわかっていなか
った。

愛媛大の村井純子准教授
(分子生物学)らのチーム
は、このたんぱく質を多く
作る血液がんの細胞と、作
らない細胞の2種類を準備
し、抗がん剤を振りかけた。
その結果、このたんぱく

質を多く作る細胞では、が
ん細胞が4〜5倍の頻度で
死滅した。分析を進めると、
抗がん剤の投与がきっかけ
となって、がん細胞の増殖
をこのたんぱく質が抑制

し、抗がん剤の効き目を高
めていることがわかった。
患者のがん細胞の中でこ
のたんぱく質が作られてい
るかは簡単な検査でわか
る。村井准教授は「これま
ではどのタイプの抗がん剤

が効くか事前に予測する方
法が少なかった。医療現場
で使えるようになれば、特
性に合わせた治療を行える
ようになる」と話す。

新潟大の吉原弘祐教授
(産婦人科分子生物学)の
話「謎が残されていたSL
FN11の細胞内部への働き
を解き明かした成果だ。様
々ながんで作られるため、
臨床現場での広い応用が期
待できる」

